

# 植物の擬人化の系譜

伊藤 信博

## 1. はじめに

天保十一年（1840）に発行された「青物年季證文之事」と題される木版一枚摺りの摺物がある。明治十三年（1880）に冊子体で出版された江戸後期の様々な時期に一枚摺りで出版された番付表を収集した「番付集」である『浪花みやげ』（大阪市立中ノ島図書館や三井文庫）に所収される摺物である。

江戸の資料でよく見受けられる「奉公人請證文」という身売り証文に見立てて、果蔬を擬人化し、地口として紹介しており、この摺物の内容を翻刻すると以下のようになる。

「一此せりと申  
女、出生ハみかん  
之國ちんぴごほり  
ゆうかうじ村、心  
松茸せう路成者ゆ  
えかうたけきうり  
様へごほうかうか  
うにさんせう仕候  
所実正也。然る上  
ハうどの三月ヨリ  
芋の三月迄中年九  
ねんぼうとあい定  
め請取ところてん



図1 「青物魚奉公人請證文」三井文庫所蔵

じつしょうがなり。御取次としてくさつたきんかんたつた五つぼ。だんなめうとにして、二股大根三つ葉三つ葉に候へ共、ちよつ共そつ共、いも頭様へのし程もごまふりかけ申間鋪候、依而宗旨ハ代々南妙法れんそう浅草苔三枚くハへ山れんこん寺ぎなん和尚二紛無御座候、青物一札仍而如件。桃栗三年柿ノ八月 奉公人 せり。茄子ノ吉日 請人竹の幸右衛門 天満大根屋瓜右衛門殿」（図1）。

安永八年～天明二年頃（1779～1782）に制作されたとされる伊藤若冲の「果蔬涅槃図」もこのように果蔬を擬人化した作品とも考えられる<sup>1</sup>。また、幕末の安政六年（1859）に江戸の辻岡屋から板行された「青物魚軍勢大合戦之図」も擬人化された作品としてよく

知られている。早稲田大学や東京大学図書館が所蔵する三枚続き (36×77cm) の錦絵である。

この錦絵に描かれている植物は蚕豆、茄子、慈姑、桃、玉蜀黍、蜜柑、葡萄、真桑瓜、唐辛子、山芋、西瓜、松茸、南瓜、冬瓜、百合根、大根で、魚類と戦っている図である。安政五年 (1858) に長崎から始まったコレラが後に江戸で流行し、一ヶ月間で死者が二十万人を越えたとされる。この錦絵では、青物がコレラに罹らない食物で、魚貝類はコレラに罹りやすい食物と見立てられ、青物と魚貝類の戦争を描き、最後に青物が勝利する構図となっている<sup>2</sup>。

ところで、このように植物を擬人化して戦わせる主題の初期の作品には、文明年間 (1469年) 以前の成立とされる『精進魚類物語』がある。事実、植物の擬人化は室町時代から少しずつではあるが、物語の中では語られており、図像化は江戸時代に顕著に起きている。図像化の理由は、江戸において、社会を構成する諸道芸人と職人の生業の営み、博物誌としての本草書や地誌としての図会等、イメージ化される文化の領野が限りなく広がったからであろう。

そもそも、日本で図像の威力が最も発揮されたのは、仏教においてである。仏像や浄土変、曼荼羅として「聖なるもの」の輝かしい姿や他界の荘厳な形象が鮮やかな彩りと共に到来し、古代人の憧憬の的となる。そして、仏教の儀式である俗講がやがて唱導を伴い、説話化を促し、新たな文化を生み出す源泉となったのである。物語や説話等の文芸も、やはり絵巻や絵本という「絵ものがたり」となって展開し、享受されるようになる。このような文化的連続性に鑑みると、植物の擬人化、そして、その図像化もイメージ化される文化の領野が広がる中で発展したと考えられる。

しかし、特に江戸時代において、どのような植物が擬人化されてきたのかについては余り深く考えられてはいない。いわゆる、黄表紙などの読み本が中心であったからかもしれない。しかし、根菜類、瓜類、または外食産業で販売された食物を中心に擬人化された傾向があるため、どのような理由の基にそれらの植物の擬人化が成立してきたのかにも注目する必要がある。

そこで、室町後半から江戸末期までの文芸作品や図像の中から擬人化された植物を中心に分類することで、植物の擬人化の傾向を分析し、その特徴から江戸文化における果蔬の擬人化を考察したい。そして、植物の擬人化が図像として紹介されるようになった要因についても言及したいと考えている。

## 2. 文芸作品における植物の擬人化

植物を擬人化して戦わせる主題では、文明年間 (1469年) 以前の成立とされる『精進魚類物語』が有名である。お伽草子の「異類物」にも、植物が擬人化された物語として、

『あさかほのつゆ』、『花鳥風月の物語』、『月林草』、『桜梅の草子』、『姫百合』、『墨染桜』等があり、徳田和夫氏が紹介する17世紀後半に制作された伝季吟筆・異類合戦物（仮題）『合戦巻』<sup>3</sup>もそのような植物の擬人化の物語である。

また、江戸時代に入り、『精進魚類物語』を子供向けに記したとされる『うおがせん并しやうじんもの』があり<sup>4</sup>、江戸の後半には、『魚類青物合戦状』、『食類合戦和睦香之物』、『さかなあを物大合戦』、『化物大江山』等にも擬人化された植物が見られる。

植物の擬人化の点において、徳田和夫氏は『榻鳴暁筆』<sup>5</sup>第四「相論 上」「草花」を取り上げ「草花をもって論争物に仕立てる発想を考える上では見逃せない。」と論じている<sup>6</sup>。また、草花の擬人化を創りだす基盤には、『古今序註・古今集註』に記される「住吉の忘れ草」説話、『蔵玉和歌集』における植物説話、『古今和歌集』二百三十九番歌の注釈説話、『今物語』第二十六「桜木の恋人」、お伽草子『かざしの姫君』等の「異類婚姻譚」も影響を与えているとする<sup>7</sup>。

そこで、先ず、これらの物語で、擬人化されている植物を表にした上で、特徴を分析し、植物の擬人化について考察したい。

1) 『精進魚類物語』（「東京大学総合図書館蔵寛永頃版本」を参照<sup>8</sup>。）

・大豆 ・落 ・粟 ・琪樹 ・桃の花 ・ワカメ ・昆布 ・海松目 ・蒟蒻  
 ・大根 ・苳 ・蓮根 ・胡瓜 ・豌豆 ・茗荷 ・薺 ・蕨 ・筍 ・冬瓜  
 ・椒 ・蕎麦 ・山芋 ・エビ芋 ・炒豆 ・實芥子 ・荒布 ・青苔 ・紅苔  
 ・鶏冠苔 ・水苔 ・山葵 ・茄子 ・瓜生 ・苔豆 ・栗 ・椎 ・桃 ・棗  
 ・熟柿 ・石榴 ・柑子 ・大角豆 ・橘 ・李 ・梨 ・松茸 ・柚皮 ・薑  
 ・蕨 ・小豆 ・鞘豆 ・深澤芹 ・覆盆子 ・零餘子 ・椎 ・枇杷 ・興米  
 ・青蔓 ・入麵 ・納豆 ・摺豆腐 ・蕎麦 ・味噌 ・唐醬 ・草餅

2) 『さくらの姫君』（「国学院図書館蔵」を参照<sup>9</sup>。）

・桜 ・山吹 ・藤 ・蓮華 ・つつじ ・椿 ・青柳 ・卯の花 ・蔦 ・松  
 ・梅 ・桃の花 ・山椒

3) 『あさかほのつゆ』（「寛永頃刊本」を参照<sup>10</sup>。）

・桜 ・萩 ・菊 ・紅葉 ・薄 ・朝顔 ・夕顔 ・橘 ・浮き草 ・青柳

4) 『花鳥風月の物かたり』（「資料編纂所蔵」を参照<sup>11</sup>。）

・糸桜 ・リンドウ ・吾亦紅 ・紅梅 ・白梅 ・一重桜 ・八重桜 ・山桜  
 ・椿 ・女郎花 ・紫陽花 ・柘植 ・岩ツツジ ・萩 ・糸薄 ・卯の花  
 ・床夏（石竹） ・杜若 ・牡丹 ・松 ・沈香 ・藤 ・夕顔 ・山吹

5) 『月林草』（「赤木文庫旧蔵」を参照<sup>12</sup>。）

・梅 ・竹

6) 『合戦巻』（伝季吟筆・異類合戦物『合戦巻』を参照<sup>13</sup>。）

・落 ・蕨 ・蕙苳 ・苳 ・朝顔 ・華鬘草<sup>けまんそう</sup> ・篠 ・桜 ・鏡草（大根）  
・末摘花<sup>すえつむはな</sup>（ベニバナ） ・夕顔 ・鬼燈<sup>いとすき</sup> ・糸薄<sup>いとすき</sup> ・旗薄<sup>はたすき</sup> ・葦 ・蘆 ・帳吊草  
・芝 ・萩 ・薺 ・榎 ・木耳 ・朝菜 ・夕菜 ・杜若 ・葛の葉 ・忘れ草  
・松 ・桂 ・薊 ・卯の花 ・鎧草 ・鳥兜 ・菖蒲 ・駒繫ぎの草 ・百合  
・相撲取草 ・菊 ・蓮 ・薤<sup>はこべ</sup> ・繁縷<sup>うつぼくき</sup> ・靱草 ・土筆 ・錦草 ・ゆきのした  
・筍 ・瓢箪 ・小桜 ・蕪 ・仏の座 ・岩梨 ・杉菜 ・灯台草 ・母子草 ・稲  
・蒜 ・麻 ・菊 ・芭蕉 ・犬蓼<sup>いぬたで</sup> ・吾木香<sup>いつまでぐさ</sup> ・巴豆 ・小車花 ・堇  
・藤 ・芹 ・蓼 ・深見草（牡丹） ・えび葛（葡萄） ・鼓草 ・茗荷 ・葵  
・楨 ・矢筈草 ・桔梗 ・女郎花等

7) 『魚類青物合戦状』（「静嘉堂文庫蔵」<sup>14</sup>）

・豆腐 ・蒟蒻 ・麩 ・納豆 ・干瓜 ・芋茎<sup>やまいも</sup> ・薯蕷 ・夕顔 ・大根 ・干蕪  
・藜莖 ・林檎 ・茸 ・瓢 ・蕪 ・梨子 ・茄子 ・胡蘿蔔 ・栗 ・胡桃  
・杉菜 ・葱 ・椎茸 ・舞茸 ・滑茸 ・シメジ ・昆布 ・鶏冠苔 ・岩茸  
・青苔 ・雪苔 ・独活<sup>いたどり</sup> ・虎杖 ・茗荷 ・蔓 ・黍蓼 ・蜜柑 ・大角豆 ・蕨  
・荔枝 ・榧 ・胡瓜 ・海松 ・蓼 ・杜 ・芹 ・蓮の根 ・薑 ・鶯菜 ・萩  
・葡萄 ・珊瑚樹 ・沢湯 ・水菜 ・土筆 ・枸杞 ・山葵 ・山刀大豆<sup>なたまめ</sup> ・苳  
・ほうれん草 ・柚子 ・すい蔓<sup>15</sup> ・糸瓜 ・越瓜奈良漬 ・黒胡摩 ・茄子漬  
・マタタビ

8) 『食類合戦和睦香之物』<sup>16</sup>

・自然薯 ・長芋 ・若菜 ・嫁菜 ・豆腐 ・雪花菜<sup>きらす</sup> ・アサツキ ・山椒  
・里芋 ・青柚子 ・慈姑 ・菜漬け ・浅漬け ・沢庵漬け ・孟宗竹 ・茶漬  
・栗芋 ・八頭 ・エグイモ ・芭蕉 ・菊葉 ・人参 ・唐辛子 ・山葵  
・柚子 ・大根 ・胡椒 ・昆布 ・海苔 ・蒟蒻 ・麩 ・茄子 ・豌豆  
・ツクネ芋 ・蓮の根 ・唐麵 ・麦飯 ・牛蒡 ・水菜 ・葱 ・小松菜  
・栗の飯 ・蕎麦切 ・素麵 ・奈良漬等

例として挙げたものだけでなく、室町後半から江戸後期までの期間には、鳥、虫、魚類、植物を擬人化した「異類物」の例は、『虫歌合』、『鳥歌合』、『鴉鷲物語』、『隠れ里』、『桜梅の草子』、『はなひめの物語』、『姫百合』、『かざしの姫君』、『墨染桜』（草木太平記）、『十二類合戦絵巻』、『魚太平記』、『諸虫太平記』、『小夜嵐』、『続小夜嵐』、『地獄太平記』、『龍宮魚勝戦』、『鳥羽画卷物之内合屁戦』、『化物大江山』、『太平喜餅酒多多買』、『諺東埔寨掌』等数多い。

そして、上述した徳田和夫氏が指摘するように、「論争物」または「合戦物」が多いのは事実である。江戸時代の作品を中心に構成された『万物滑稽合戦記』<sup>17</sup>には『精進魚類物語』を筆頭に擬人化された39作品が紹介されている。

そのような背景も含め、上述した作品の内容や分類した植物から幾つの特徴があることが分かる。

- ① 室町後半に創られた物語には「異類物」は多いが、果蔬や山野の食物系の植物を中心に扱ったのは、『精進魚類物語』のみである。
- ② 「論争物」ではあるが、草木が主人公ではあっても、その内容は公家の恋愛物語と同様であり、七・五調で語る話が室町後半作には多い。また、和歌も多用される傾向にある。
- ③ 室町後半に創作された作品には、②で挙げた七・五調の中に、掛詞や縁語が多用され、言語遊戯も多い。そして、江戸に入ると、七・五調で語られる作品群は、地口のような洒落が増加する傾向がある。
- ④ 室町後半の作品には、「草木国土悉皆成仏」と記される作品が多数ある。
- ⑤ 江戸初期の作品から、同じように七・五調ではあっても、食物である植物が記される傾向が強くなる。
- ⑥ 江戸の後半には、食物関連の合戦物が増加する。

ところで、『精進魚類物語』は果蔬などを擬人化しているが、この時代にはどのような果蔬が栽培されていたのであろうか。江戸初期の正保二年刊（1645）である松江重頼著の俳書『毛吹草』は山城国の名物として、干瓜、筆柿、半女桃、八条浅瓜、九条真桑、青瓜、芋、扣菽、水菜、大宮通葡萄、牛蒡、宮司梅干、龍安寺松茸、内野蕪、蓮台野大根、嵯峨葡萄、木練柿、水尾柚、梅尾茶、吉田大根、梅漬、洪柿、楊桃、甘干柿、唐菘、深草糸瓜、武田落、鳥羽瓜、茶、円柿、狛越瓜、茄子、薯蕷、ムカゴ、柑子、金柑、柚柑、橙、九年母、干姜、紫蘇、薄荷、山城米と43種類を挙げる。

また、1592年成立とされる『全浙兵制考附日本風土記』<sup>18</sup>第五卷には、日本で生産される果蔬として、梨、栗、棗、桜桃、胡桃、柿、葡萄、楊桃、橘、橙、菱、蕪、蓮、苦瓜、柘榴、栗、茄子、瓜、西瓜、胡瓜、山芋、筍、木耳、韭、蒜、昆布、海草、青菜、蕨、紫蘇、芹、白菜、昆布、唐辛子、豆等を挙げている。この本や『毛吹草』に記される根菜類や果物は、『精進魚類物語』で擬人化された果蔬とほぼ同様であり、『精進魚類物語』に記される果蔬は、その時代の人々が生産し、食料としていた背景があることは明らかである。

ところで、『精進魚類物語』だけがこの時代の果蔬に関する擬人化の唯一の資料ではない。狂言には『菓争』と題される擬人物がある。橘、九年母、柚子、蜜柑、仏手柑、金柑等の精と栗、梨、梅、柘榴、棗、桃等の精が擬人化されている「合戦物」で、能の謡曲である『花軍』の替間であったとされる<sup>19</sup>。先程挙げた『毛吹草』では、「花軍」は春（三月）の季語としているが、謡曲『花軍』は女郎花、白菊、草花の精などが現れる「合戦物」で、舞台は秋である<sup>20</sup>。

能の謡曲では『花軍』以外にも、『梅』（梅の精）、『杜若』（杜若の精）、『西行桜』（桜の精）、『墨染桜』（桜の精）、『高砂』（松の精）、『朝顔』（朝顔の精）、『六浦』（楓）、『芭蕉』（芭蕉の精）、『藤』（藤の精）、『遊行柳』（柳の精）等があり、前世が人間であったとする『定家』等も植物の擬人化の作品である。

『今昔物語集』巻二十第二十二「比叡山横川僧受小蛇見語」では、死に至る寸前に僧が使っていた酢瓶を自分の死後に誰が所有するのだろうかと妄執した結果、小さな蛇となって生まれ変わったことを記す。能の謡曲『定家』では、定家と式子内親王の悲恋が、定家の妄執となり、死後に蔓となり、彼女の墓に這いまとうことを語る。

このように、『今昔物語集』の時代には、死後に生前の行いや妄執によって、動物等に生まれ変わることが多く、十三世紀以降は、遂に人間の個の魂が政治的復讐を遂げるため「人の霊が天狗」となるような発展形態ももたらした<sup>21</sup>。そして、『定家』が創作された時代には、死者の霊が生前の妄執によって、植物に生まれ変わることがあることを示しているのである。

そして、上述した謡曲に共通する表現は、仏法に根差した思想である心を持たない草木でも成仏するという「草木国土悉皆成仏」である<sup>22</sup>。この思想は元来、天台宗の本覚思想に基づくものと思われ、『天台本覚論』『三十四箇事書』には、「草木成仏事」の条があり、「真如観」にも同様な思想が記されている<sup>23</sup>。

「草木成仏事」の条では、「(前略) ただし、草木成仏と説く事は、他人の情を破さんがために故に。他人の意の云く、草木はただ、草木にして、生界・仏界の徳なしと。一向ただ非情にして、有情にあらずと。故にこれを破す。一家の意は、草木非情といえども、非情ながら有情の徳を施す。非情を改めて有情と云ふにはあらず。故に成仏と云へば、人々、非情を転じて、有情となると思ふ。全くしからず。ただ、非情ながら、しかも有情なり (後略)。」(「草木成仏事」の条)

「(前略) 一色一香ハ、草木瓦礫・山河大地・大海虚空等ノ一切非情ノ類ナリ。(中略) 又有情類ノ真如ノミナニ非ズ、非情、草木等ニモ、真如ナレバ、一房ノ花ヲ捧ゲ、一捻ノ香ヲ燃テ、一仏ニ供養スル時、一色一香中道ニ非ズト云事ナキガ故ニ、此一花一香、即ナレバ (中略)、サレバ、草木・瓦礫・山河・大地・大海・虚空、皆是真如ナレバ、仏ニアラザル物ナシ (後略)。」(「真如観」)

『涅槃経』『迦葉菩薩品』には、「非仏性者。所謂一切牆壁瓦石無情之物。離如是等無情之物。是名仏性。」<sup>24</sup>と記されるため、草木などの「非情成仏」はないとされているのだが<sup>25</sup>、「三十四箇事書」や「真如観」では、非情<sup>26</sup>である草木は存在そのものが仏であると記すのである。そして、『今昔物語集』巻第十一「傳教大師、亘唐傳天台宗歸來語」第十では、「(前略) 今ハ比叡山ヲ建立シテ多ノ僧徒ヲ令住メテ、唯一無二ノ一条宗ヲ立テ、有情・非情、皆、成佛ノ旨ヲ令悟メテ、國ニ令弘シ (後略)。」<sup>27</sup>と記し、このよう

な思想の影響を明示している。

「三十四箇事書」、「真如観」のどちらも、伝源信となっており、その真偽が論争とはなっている。しかし、少なくとも、「草木国土悉皆成仏」思想は謡曲の成立期に大きな影響を与えていたことは間違なく、『定家』に現れる蔦の妄執もこの思想の影響下にある。

徳田和夫氏が指摘する『蔵玉和歌集』における植物説話、『古今和歌集』二百三十九番歌の注釈説話、『今物語』第二十六「桜木の恋人」等も掛詞や縁語が多用される和歌の伝統を基とし、この「草木国土悉皆成仏」思想の影響により生まれてきたのであろう。

中世において、『古今和歌集』の暗誦が貴族の嗜みとされたと言われるが、その『古今和歌集』の巻第十には「物名」があり、梅、樺桜、李の花、唐桃の花、橘、黄心樹、桂、葵、リンドウ、薔薇、女郎花、桔梗、紫苑、薄、朝顔、忍ぶ草、唐菖、花菅、川菜草、サルオガセ、苦竹、蕨、笹、松、梨、棗、胡桃、夏草、粽等も、主題や掛詞、縁語として使用されている。

『金葉和歌集』「くさきまで なげきけりとも みゆるかな まつさえふちの ころもきてけり」(六百十四 僧正行尊)、『千載集』「春をへて 花ちらましや おく山の かせをさくらの 心とおもはは」(八十六 藤原基俊)等は植物の擬人化が強く現れている作品と思われる。また、『山家集』だけでも、桜、紅葉、梅、松、柳、杉、柴、橘、萩、女郎花、竹、卯の花、菊、薄、蓮、茅、藤、菫、撫子、朝顔、夕顔、藤、紫蘭、姫百合、露草、菖蒲、七草、みまぐさ、蔦、葦、葎、杜若、芭蕉など植物だけでなく、蓬、芹、蕨、えぐ芋、瓜、もしほぐさ、薺、蓼、蓴菜(ぬなは)、わかふのり等の食物も歌にしている。そして、「霜かづく 枯野の草の さびしきに いづくは人の 心とむらむ」(冬歌七二三)などは、植物を擬人化した歌であろう。

このように『山家集』が使用した植物名の多くは、『さくらの姫君』、『あさかほのつゆ』、「花鳥風月の物かたり」、『月林草』、『合戦巻』(伝季吟筆)、『姫百合』、『墨染桜』等に記される植物と多くが共通している。そして、『月林草』には、「草木国土しつかひ成仏と、きくときは、なにのうたかひか」の表現もあり、『姫百合』、『墨染桜』にも同様な表現がある。この事実からも『古今和歌集』の掛詞や縁語の伝統と「草木国土悉皆成仏」思想の結びつきの中から、植物の擬人化が誕生してきた可能性が高いことが分かるのである。

ところで、「お伽草子」の「伽」とは、ある人に対し、「相手をする事」を意味し、淋しさなどを慰めたり、紛らしたりの意味も「伽」には付加された。そうした話者が「お伽衆」と呼ばれ、彼らが話す相手は身分が高い人物で、教養も高かったであろうと推定できる。そして、「お伽衆」が語って聞かせる内容も相互に共通の文化的知識が基盤となっていたであろう。つまり、和歌に対する知識も当然双方に備わっていることになる。

したがって、和歌において、比喩的に使われた植物名が物語の主題となり、「伽」とし

て語られていったことも想像できる。その意味では、食物となる果蔬の物語が少ないのは、あまりにも現実的であったからかもしれない。そして、能の謡曲である『花軍』の替間に狂言として『菓争』が演じられるのも、このようなモチーフが、現世肯定、享楽、時事性を持った地口で語られる「笑い」の対象とされることが主であったからであろう。

また、この「草木国土悉皆成仏」思想は、実は、日本に生まれた思想ではない可能性もある。隋代の仏教書である『大乘玄論』巻第三は、「豈非是明凡聖無佛性耶。衆生尚無佛性。何況草木。以此證知。(中略)明山河草木皆心想。心外無別法。此明理内一切諸法依正二。以依正不二故。不但衆生有佛性則草木有佛性。(中略)若衆生成佛時。一切草木亦得成佛。」<sup>28</sup>と記す。

天台中興の祖と称される唐の湛然(711~782年)もその著作『金剛錍』において、「乃謂一草一木一礫一塵。各一佛性各一因果具足緣了。若其然者僕實不忍。何者草木有生有滅。塵礫随劫有無。豈唯不能修因得果。其亦乃佛性有滅有生。」<sup>29</sup>と記し、草木礫塵の一つ一つに全て仏性があると記しているからである。

また、明代の儒学者である王陽明の語録集である『伝習録』では、「(前略)人の良知は就ち是れ草木瓦石の良知なり。若し草木瓦石に人の良知無くんば、以て草木瓦石たる可からず。(中略)風雨、露雷、日月、星辰、禽獸、草木、山川、土石は、人と原只だ一體なり。(後略)」と記し、草木、山川も含め、自然のもの全てが人と一体であるとする哲学がこのような仏教思想を源泉として誕生している<sup>30</sup>。

日本においても「草木国土悉皆成仏」は、『卍字義』に「草木也成。何況有情」と記されることから、空海説<sup>31</sup>や貞観十一年~仁和元年(869~885)の間に成立した『観成草木成佛私記』から天台僧安然とする末木文美士氏の説がある<sup>32</sup>。どちらにしても中国の思想と深い関連があり、文化交流が強く行われていたことを示すものと捉えて良い。

ところで、これらの擬人化された物語は「合戦物」が多く、『太平記』や『平家物語』の影響もあるとは考えられるが、金文京氏は、明代末期には文学の中で、「異類論争物」あるいは「争奇類」と称される一群の作品があり、二つの対照的な事物の優劣争いを主題としていたと指摘する<sup>33</sup>。

『風月争奇』、『花鳥争奇』、『山水争奇』、『蔬果争奇』、『梅雪争奇』、『童婉争奇』等がそうであり、どれも内閣文庫が所蔵している<sup>34</sup>。『童婉争奇』は林羅山の自筆もある写本であり、十七世紀前半には日本に輸入されていたと考えられている<sup>35</sup>。

金文京氏はさらに、このような「異類論争物」として、唐代の「茶酒論」、「燕子賦」、宋代『全芳備祖』「花部・梅部」、『事林広記』所収「嘲戲綺語・嘲人好色」、明代の嘉靖年間(1522~1566)刊の『清平山堂話本』に所収される「梅杏争春」等の中国の例、伝二条良基(1320~1388)作「餅酒歌合」、伝一条兼良(1402~1481)作「酒飯論」、大永五年(1525)仁岫宗寿による「梅松論」等の日本の例を挙げ、発想の類似性や禅林での



創作から中国からの影響を指摘している<sup>36</sup>。

文化の交流の視点に鑑みれば、中国文化の影響があつて、これらの物語が成立してきたことは十分に考えられるのである。『応仁記』、『結城戦場物語』、『大塔物語』、『明德記』、『永楽記』、『信長公記』等は場面により、七五調が使用され、語り物の特徴が現れている。しかし、同じ「合戦物」でも、優劣を競うより、敗者に対しても、その活躍を強く印象付けようとする傾向があり、このような「合戦物」が大陸文化や固有の日本文化との融合の中から生まれてきたとも考えられるため、今後の課題としたい。

この章では、室町後半から江戸末期までの文芸作品中から擬人化された植物を中心に分類し、室町末期の作品群には、

- ① 果蔬菜や山野の食物系の植物を中心に扱った例は、『精進魚類物語』、『菓争』のみであったこと。
- ② 「合戦物」の形はとっても、公家の恋愛物語と同様であり、七・五調で語る物語が室町後半には多く、和歌も多用される傾向にあったこと。
- ③ 掛詞や縁語が多用され、言語遊戯も多数表現されていること。
- ④ 「草木国土悉皆成仏」の思想が現れていること。

等の特徴があることを示し、和歌の掛詞や縁語の影響が将来の地口に変化する可能性を見出した。また、「草木国土悉皆成仏」思想が植物の擬人化に対して大きな影響を与えていることや果蔬菜を主題とする時は、現世肯定、享楽、時事性を持った地口的な「笑い」の対象となっていた可能性を示唆した。

次章では、この章で指摘した他の特徴を分析することで、図像における植物の擬人化も含め、江戸における植物の擬人化が室町後半の文芸作品における植物の擬人化と相違する点を検討し、その理由を探りたい。

### 3. 江戸文化と植物の擬人化

上述したように、江戸初期に成立したとされる『合戦巻』(伝季吟筆)には、室町後半に創作された文芸には余り見られない特徴がある。室町後半の作品群と同様に植物等が掛詞や縁語の影響がある形で擬人化されてはいるが、地口的な駄洒落も多く、野草や食物となる野菜も多く擬人化されている点である。

『合戦巻』(伝季吟筆)に描かれる食物になる果蔬菜は、落、蕨、薏苡、苜蓿、大根、夕顔(瓢箪)、薺、榎、木耳、朝菜、夕菜、蓮、薤、土筆、ユキノシタ、筍、蕪、仏の座、岩梨、杉菜、稲、蒜、巴豆、芹、蓼、えび葛(葡萄)、茗荷が挙げられる。

また、料理本である寛永二十年版の『料理物語』(1643)からは、『合戦巻』(伝季吟筆)に記される深見草(牡丹)、薊、嫁菜、鬼燈、葛の葉、壁生草、繁縷、靱草、葦矢筍草等も食用とされていたことも分かる。そして、江戸においては、中期、後期と時代

が下がるに連れ、料理本に記される食物系の果蔬の擬人化が増加する傾向にあるのである。

図1で挙げた天保十一年(1840)の「青物年季證文之事」は「青物」というモチーフで、「奉公人請證文」という身売り証文に見立て、芹、蜜柑、陳皮、麴、松茸、竹、胡瓜、牛蒡、大根の漬物、山椒、独活、九年母、心太、生姜、金柑、大根、三つ葉、芋頭、胡麻、ホウレン草、浅草海苔、蓮根、銀杏、桃、栗、柿、茄子、瓜を地口で、擬人化して記すが、このような作品群が多くなるのである。

ところで、『江戸時代 落書類聚』<sup>37</sup>で、江戸時代における落書に植物や果蔬がどのような地口で表現されているかを調べると、宝永落書には「廻向文」として瓜や豆が出てくる。また「献上物之覚」として、「恥かいても命長芋」、「追付菊之間つくねいも」、「最もあぶ梨子」などの駄洒落での政治批判が表現されている。また、「御馳走之献立」にも同様に食べ物を使った駄洒落が記されている。

天保の飢饉を皮肉った「高く払いましょ玉落とし」や「不祝儀御献立」も同様で、果蔬を使用した世相に対する皮肉が記されている。この『落書類聚』には『野馬台詩』をなぞった「野暮台詩」、漢詩、狂歌等様々な形で、世相が表現されているが、植物も含め、果蔬に関しては、地口か献立表を借りたユーモラスな政治批判が中心となっている。

ところが、『落書類聚』を江戸時代全体で見ると、一つの変化が起こっていることに気付く。全体の落書量自体は初期、中期、後期と変化しないが、各時期毎に分類してみると、植物を擬人化して、落書にする利用数が減ることや落書に使われる植物の種類に変化が見られることである。宝永年間(1704～1710)では、様々な植物が落書に使われていたのに対し、江戸の中期以降は、食物系のみが落書に使われ、鑑賞的な植物や花等は全く使用されず、果蔬も使用回数がかなり減少しているのである。

「宝永落書」では、朝顔、百日紅、蔦、水仙、福寿草、百合、忍草、鬼薊、菊、松、桜等室町後半に擬人化された植物も使用されているが、食物系も多くが地口で語られている。瓜、苺、長芋、青海苔、素麺、松露、葡萄、ツクネ芋、梨、栗、芥子、干し鰻、椎茸、昆布、蒟蒻、豆腐、嫁菜、牛蒡、奈良漬、独活、ホウレン草、美濃柿、香の物、大根、餅、茗荷、菱、人参、金柑、田楽、唐辛子等である。

「甲府勤番」(1725年以降)では、鰻、黍、団子、麦切り、奈良漬、米、「寛保落書」(1741～1743年)では、米、「明和大変記」(1764～1771年)は、生姜、椎茸、奈良漬、長芋、牛蒡、芹、青菜、フキノトウ、九年母、饅頭、モヤシ、餅、蕎麦、「天明落書」(1781～1788年)、蜜柑、大根、蓮根、木耳、唐辛子、梨、松茸、「天保落書」(1830～1843年)は、梅、浅草海苔、辛子味噌、大根、木耳、山芋、椎茸、味噌漬、青菜、葡萄となっている。

つまり、物語では、『合戦巻』(伝季吟筆)が創られた江戸初期から、中期、後期と全

体をみると、初期は鑑賞系の植物と果物が同じく擬人化されて描かれていたのに対し、後期には『魚類青物合戦状』や『食類合戦和睦香之物』のように果物や加工食物の擬人化が増える。逆に、落書では、初期では、物語と同様に、鑑賞系の植物や果物も擬人化されているが、中期、後期では、果物や加工食物の擬人化が物語のように余り増加しない傾向となっている。

そこで、このような変化が起こった理由を、幾つかの項目に分類し、考察してみたい。先ず、江戸の文化史全体の流れを考えると、江戸の文化は、戦国末期の文化の継承から、寛文期頃（1661～1673年）に幕府の文治政策の変化が文化に影響を与え、変容が始まり、元禄期（1688～1703年）に初期の文化の隆盛を見る。そして中期、後期とそれぞれ文化的な特徴を持つに至るのである。

#### ①『本草綱目』と博物学の発展

慶長年間（1596～1614）に中国から輸入された『本草綱目』<sup>38</sup>の普及が、江戸文化に大きな影響を与えたと言われている。元和三年（1617）に江戸幕府の御用絵師

となった江戸時代の狩野派を代表する絵師である狩野探幽（1602～1674年）は、『探幽縮図』「草木生写」（京都国立博物館蔵）で、二十五点の草花の写生を残している（図2）。そして、寛文元年～延宝二



図2 『探幽縮図』「草木生写」より 京都国立博物館蔵

年（1661～1674）の頃に描かれたとされる写生帖「狩野探幽草木花写生図巻」（東京国立博物館蔵）にもトマトの画も含め、約百五十種の植物を描いている。

また、八代将軍吉宗（1684～1751年）の物産政策も江戸期における多大な文化的影響を及ぼす。吉宗以前には、薬や砂糖などが大量に輸入され、その代金として、金銀が大量に海外に流出する。そうした輸入を抑え、自給自足を図るため、吉宗は採薬使を派遣し、国内で生産可能な薬物や有用な物産を調査したことが大きな要因となり、全国的に

動植物の関心が高まっていくのである<sup>39</sup>。

また、享保二十年～元文三年（1735～1738）に、全国の産物調査を吉宗は行う。『享保・元文諸国産物帳』がその結果であり、産物名が方言で記された場合、理解不能との理由から、各藩からの産物調査報告書には、図での説明まで要求し、日本全国における生産物を詳細に掌握したのである。例えば、福岡県立図書館所蔵『筑前國産物絵図帳』は国許控え本であり、野草、野菜等が正確に、丁寧に描かれている<sup>40</sup>。

このように情報を正確な図像によって発信する機運の高まりから、吉宗以降に出版されたのが『秋野七草考』、『胡椒考』、『草木奇品家雅見』、『有毒草木圖説』、『野菜博録』、『動植名彙』、『天保六年物産會目録』、『長崎諸名産物實録秘書』、『近江物産誌』、『熊野物産初誌』、『琉球産物志』、『本草會物品目録』、『日本山海名物圖會』、『五畿内物産圖會』、『地名米雜穀位覚』等である<sup>41</sup>。

国内だけの調査ではなく、吉宗は海外調査も行い、対馬藩を通し、朝鮮から薬草等を取り寄せ、日本で生産されていないか確認を行う。調査の実施に当たったのは、採薬使に登用された医者の方羽正伯<sup>42</sup>で、植村政勝等と各地の採薬調査を行う傍ら、幕府が作った下総薬園で、薬草の栽培を試みた。

つまり、吉宗以前に日本で生産がなかった植物を新たに栽培する試みであった。寛延元年刊（1748）である田村藍水著『朝鮮人参耕作記』はこのような意図の基に栽培された朝鮮人参の生産記録である。また、この時期から、中国から西洋の翻訳書も含め、植物学、動物学及び多くの農書も輸入されている。

吉宗のこのような産物政策から発展した博物学、物産学は、国内の動植物の観察、研究を促し、動植物の写実的な図像を生み出す。予楽院近衛家熙（1661～1736年）が描いた『花木真写』は百二十五種の植物の写生図で、葉脈も含め、正確に描く植物の形状が描かれている。

そして、博物学の集大成が日本で最初の植物図鑑である『本草図譜』を誕生させるのである。幕臣の本草学者である岩崎灌園（1786～1842年）が文政十一年（1828）に完成させたとされ、自身で写生し、色彩も施している精密な植物図と解説付きの全九十六巻、九十二冊の植物図譜である。

大名でも、讃岐藩松平頼恭（1711～1771年）、肥後藩細川重賢（1720～1785年）、薩摩藩島津重豪（1745～1833年）等を含め、秋田藩、伊勢長島藩も優れた写生図を残している<sup>43</sup>。そして、これらの写生図はどれも対象物の即物的な描写に徹している点が注目され、西洋の陰影法を学んだのかとも思わせる技法で描かれているのである。

中国においては、十六世紀末の明時代にイエズス会宣教師であるマテオ・リッチが西欧画法を持ち込んでいることも明らかとなっており、この時代に中国人によって描かれた宗教絵画には、陰影法の影響があることは、フランス国立図書館蔵『天主降生出像経

解』、『天主降生言行紀像』、『進呈書像』（中国の皇帝に進呈されたキリストの一生を描いた図像）等で明らかである。

また、享保二年（1717）にオランダ商館長であるヨアン・アウエルが江戸に参府した折りに、吉宗が所蔵していたヨン・ヨンスターン著『動物図譜』について、吉宗自身が様々な質問をしている点やオランダや中国から西洋文化の輸入に努め、殖産興業開発や航海貿易を行い、優れた写生図である『成形図説』を残した島津重豪がシーボルトと会見している等の点も西洋絵画の技法取得という点で注目に値する。

どちらにしても、享保五年（1720）の漢訳洋書輸入解禁以降、徐々にケンペル、ツェンペリー、シーボルト等がもたらした蘭書の影響も含め、西欧の技法も学ぶことで、江戸の博物学は発展して行ったのであろう。

例えば、安永二年（1773）以前に日本に入ったとされ、広く参考にされたドイツ人ウエイスマン著の『花譜』を幕府のお抱え医師であった栗本丹洲（1756～1834年）がその著書『洋名入草木図』で八十六点も転写していることはよく知られている。

また、文政十二年刊（1829）の伊藤圭介著『泰西本草名疏』もツェンペリー著『日本植物誌』に記された学名を対応する和名・漢名にしたもので、スウェーデンの博物学者であるカール・フォン・リンネがその著書『自然の体系』において構築した生物の分類体系も日本で初めて紹介している。

『江戸時代における唐船持渡書の研究』<sup>44</sup>及び『江戸時代における中国文化受容の研究』<sup>45</sup>を参照に、中国から輸入された美術関連の図書を調べると、安永四年～安政二年（1775～1855）の八十年間では、天保七年（1836）以降に急に増大しており、植物画の画も多いことが見て取れる（表1）。

以上のような理由から、吉宗以降、動植物に関する様々な種類の本が出版され始める。例を挙げると、『諸禽万益集』（初期の養禽書）、『日東魚譜』（始めて出版された魚譜）、『六鯨之図』（鯨やイルカ類の分類、鯨の解体図等）、『勇魚取絵詞』（肥前国の捕鯨）、『蝦

江戸時代における輸入書籍(図像関係)			
書名	数量	輸入年代	
1 一人王守愚花弄扇頁	一本	安永四年	1775
2 一人王守愚花弄扇頁	一軸	安永四年	1775
3 芥子園畫譜 初二集	六套	文化十二年	1815
4 芥子園畫譜	二部	享保二年	1717
5 書畫譜	一部十六套	寶曆九年	1759
6 書畫譜	初集四部三套 二集名四部十二套	寶曆九年	1759
7 十竹齋畫譜	五部五套	寶曆九年	1759
8 畫譜初集	五部五套	寶曆九年	1759
9 上用欽定古今圖書集成		寶曆九年	1759
10 海鏡	二十秩		
11 海鏡	二十秩		
12 海鏡	二十秩		
13 十竹齋畫譜	二部二十套	寛政六年	1794
14 十竹齋畫譜	二部十六套	寛政六年	1794
15 芥子園畫譜初集	一部一集	天保八年	1837
16 芥子園畫譜初集	一部	天保十二年	1841
17 芥子園畫譜初集	五部	天保十二年	1841
18 芥子園畫譜初集	百部名一集	天保十二年	1841
19 芥子園畫譜	一部三集	天保十二年	1841
20 芥子園畫譜	一部三集	天保十二年	1841
21 芥子園畫譜	一部八集	天保十二年	1841
22 十竹齋畫譜	五部名一集	天保十二年	1841
23 十竹齋畫譜	十部名一集	天保十二年	1841
24 十竹齋畫譜	一部一集	天保十二年	1841
25 芥子園畫譜	一部一集	天保十二年	1841
26 芥子園畫譜	十部名一集	天保十二年	1841
27 欽定書畫譜	一部六套	弘化二年	1845
28 欽定書畫譜	一部一集	弘化二年	1845
29 十竹齋畫譜	二部名一集	弘化二年	1845
30 三才圖會	一部四集	弘化二年	1845
31 芥子園畫譜	二部一集	弘化四年	1847
32 芥子園畫譜	一部一集	弘化四年	1847
33 三才圖會	一部四集	弘化四年	1847
34 欽定書畫譜	四部名八套	弘化四年	1847
35 十竹齋畫譜	五部名一初	弘化四年	1847
36 三才圖會	二部名四初	弘化四年	1847
37 三才圖會	一部四集	弘化五年	1848
38 天下名山室畫譜	一部一本	弘化五年	1848
39 芥子園畫譜	一部名一初	嘉永元年	1848
40 十竹齋畫譜	十部名一初	嘉永元年	1848
41 欽定書畫譜	一部八套	嘉永元年	1848
42 三才圖會	一部一集	嘉永二年	1849
43 聖賢圖	一部二十七初	嘉永二年	1849
44 聖賢圖	一部一初	嘉永二年	1849
45 聖賢圖	一部四集	嘉永二年	1849
46 芥子園畫譜	一部四套	嘉永二年	1849
47 芥子園畫譜	一部名一本	嘉永二年	1849
48 書畫譜	一部八套	嘉永四年	1851
49 書畫譜	一部一初	嘉永五年	1852
50 聖賢圖	二部名一集	嘉永六年	1853
51 芥子園畫譜	一部一集	嘉永七年	1854
52 十竹齋畫譜	一部一集	嘉永七年	1854
53 三才圖會	一部六套	嘉永七年	1854
54 芥子園畫譜初集	三十部名一集	安政二年	1855
55 聖賢圖	八部名一集	安政二年	1855
56 蘭文書畫譜	四部名八套	安政二年	1855
57 十竹齋畫譜	一部一集	安政二年	1855
58 芥子園畫譜	四十部名一集	安政二年	1855
59 芥子園畫譜	一部一集	安政二年	1855
60 蘭文書畫譜	一部名八套	安政二年	1855

表1 江戸時代における図像関連の輸入書籍

夷草木図」等どれも図説が付く出版物であり、鳥類や蝶類を分類した百科事典的出版物が豊富に刊行されるのである。

②「本草学」から啓蒙書へ

この『本草綱目』の研究から発展した「本草学」の影響下により、農書や飢饉や病気により生命等が危険に晒された時対処するよう「見立図」や絵入りの解説書が庶民向けに多く出版されるようになる。

例えば、享保二年刊（1717）の中条菴戸著『かてもの』は、飢饉用の食料として、蓮実、蕨、蕨の粉、豆類、山葵の他、漬物を記し、大根、蕪、芋の茎、山芋、慈姑、山芋、ムカゴを挙げる。

宝暦五年刊（1755）の建部清庵著『民間備荒録』は、飢饉用食物として、栗、蓮実、桃、蓮根、里芋、烏芋、山芋、黄芋、蕨、蕨の粉、青芋、筍、鳩麦、菱子、山椒、慈姑、鬼灯、百合根、アケビ、大根や豆類、蔓系植物等を記し、同人著で、天保四年刊（1833）の『備荒草木図』は百四種類の飢饉用食物を図で解説し、山葵、黄芋、青芋、蓮実、糸瓜、菱子、鬼灯、山椒、林檎、梨等を記す。天保八年刊（1837）中山美石『飢饉の時の食物の大略』にも、鳩麦、敗荷、蓮根、蓮の実、ツクバネ、青芋、蕨、百合根、慈姑、同年刊の白鶴義齋著『救荒便覧』にも飢饉時には、漬物を用意することを勧め、飢饉用食物として、栗、柿、葡萄、大根、菘（蕪）、ササゲ、豌豆、青芋、黄芋、蚕豆、玉蜀黍、百合根、慈姑、烏芋、葱、芹、人参や牛蒡等を挙げる。

また、『有毒草木圖説』、『救餓録』、『救荒事宜』、『ききん用心』、『饉年要録』、『荒歳流民救恤圖』等、飢饉用の保存食を紹介する本も数多く出版される<sup>46</sup>。『有毒草木圖説』<sup>47</sup>や『救荒事宜』<sup>48</sup>のように、飢饉の時に飢えた人々が食料として食さないようにするため有毒草木を正確な色付き図で説明する本も現れる。これらも、輸入された中国農書の影響が明らかである。

一方、「内藤記念くすり博物館収蔵資料集④」『はやり病の錦絵』には、薬と病の合戦図（「薬と病退治の図」<sup>49</sup>）、麻疹に罹らなくて済む呪いとして、擬人化された金柑、麦の穂等が描かれている。その他、「麻疹能毒合戦圖」<sup>50</sup>は麻疹、厄病、コレラ、熱病時の食物について描き、「青物魚軍勢大合戦之図」と同様の構図、目的の錦絵として捉えられる画である。その画には、白瓜、落、薩摩芋、金柑、栗、松茸、橘等の果物が善玉として、擬人化され、描かれている。

「麻疹禁忌荒増」<sup>51</sup>では、麻疹養生に良い食物、悪い食物と分類し、擬人化された果物が列挙されている。また、「麻疹能毒養生辨」<sup>52</sup>と題された見立番付もあり、この番付には、黒豆を大関とし、人参、インゲン豆、大根、里芋類が記されている。また、同様な資料として、絵付きの一覧表の見立番付『麻疹に禁物、麻疹によろしき物』では、食べて良い果物と良くない果物が紹介されている<sup>53</sup>。

幕末に記された『麻疹太平記』<sup>54</sup>では、麻疹の病原を断つために合戦物として記すと最初に述べる。「くだり三郎」、「かくらん斎あつがり」、「はやりころ右衛門金時」等が病気を起こすため人間の体内に入ると、牛蒡、人参、葛根湯、粥、沢庵、豆、小豆、長芋、麦、冬瓜、大根、瓜、ササゲ、薇、鈍豆、南瓜、筍、山芋、玉蜀黍、真桑瓜、西瓜、山葵、辛子、枝豆、豌豆、蓮、茗荷、梅干が応戦する。病気の味方には、毒があるとされる魚であるカツオの刺身、まぐろ、蛸、鱈等が駆けつける。最後は病気が負けて、終わる話である。

最初に例として挙げた安政六年（1859）板行の「青物魚軍勢大合戦之図」も同趣旨の物語であり、伊藤若冲の『果蔬涅槃図』も同様な趣旨から描かれた画であろう<sup>55</sup>。このような物語が成立する背景には、「本草学」の発展や『享保・元文諸国物産帳』で全国の生産物を正確に把握し、情報として、庶民に発信していた事実も挙げられ、江戸においては、野菜の集散地として発展していたからでもある。

脚気や夜盲症が江戸病み、江戸患いと称された初期には、江戸では、野菜の確保が緊急となり、葛西領で、芹、慈姑、蓮根、葱、胡瓜等の生産が高まる。また、武蔵野台地では、大根、蕪、人参、牛蒡の生産が活発化したのである。西鶴『当世胸算用』では、神田須田町の青物市場の大根を「畑が動くようである」とも記している。したがって、江戸周辺では、野菜の産地が多く、葱、胡瓜、蕪、瓜、茄子、牛蒡、大根、南瓜、茗荷、玉蜀黍、生姜山葵、独活、西瓜、筍、白菜、小松菜、蚕豆、藤豆等が、千住茄子、練馬大根等の地域名を付けて生産されたのである<sup>56</sup>。

また、『享保・元文諸国物産帳』から全国における野菜の生産高の平均を求めると、トップは大根で、12.1%、他の野菜の上位は、蕪は3.8%、里芋類、5.5%、茄子、4.7%、瓜類、5.3%となる。また、果物の生産も品種数から数えると、柿は、521種、梨、323種、柑橘類、276種、桃、187種となっている。この分類から、江戸時代の食文化における上述した果蔬の比重の高さまで計ることができる。名古屋大学文学研究科と共に、現在調査中の富山県城端別院善徳寺における食料関係資料を分析しても、「物産帳」の上位順に大根、芋類、瓜、茄子、蕪によって、多くの料理が作られていることが明白となっている<sup>57</sup>。

そして、寛永二十年『料理物語』（1643）、寛文十年『料理献立集』（1670）、元禄二年『合類日用料理抄』（1689）、元禄六年『八百屋集』（1693）、安永二年『料理いろは包丁』（1733）、安永五年『献立部類集』（1736）、嘉永二年『年中番菜録』（1849）、天保六年『江戸料理通』（1835）等の料理書から、これらの上位の野菜である大根、蕪、茄子、瓜、里芋等の調理法が必ず記されている事実を見つけることもできる<sup>58</sup>。これらの食物は飢饉用の救荒食物として保存や米との代用にも相応しいからであろうし、上述した果物も同様である<sup>59</sup>。

また、「薬と病退治の図」、「麻疹能毒合戦圖」、「青物魚軍勢大合戦之図」など擬人化された果蔬の見立画が出版される背景には、江戸期において、「本草学」及び物産研究を進める段階で、果蔬や草花図を正確に描いていた事実もある。そして、江戸の博物学が科学的に高い水準に達しており、啓蒙書の発達から、庶民を様々な方法により救おうとしていたからでもあろう。



図3 野菜 vs. 魚『軍舞』(部分)  
「うおがせん并しやうじんもの」 射和町自治会蔵

図3のように<sup>60</sup>、江戸初期と思われる作品では、人間が頭上に魚や虫を載せている作品群が多いが、東京都立図書館蔵『化物大江山』、同図書館蔵『忠臣陶物蔵』等のように、中期以降では、顔自体がモチーフの果蔬に巧みに描かれている例もある(図4)<sup>61</sup>。その背景には、このような博物学や写生術の発展があることを知るのである。



図4 『忠臣陶物蔵』(部分) 加賀文庫蔵

### ③料理本の出版と外食産業の発展

外食文化の隆盛による見立番付の発展と見立文化の影響も植物の擬人化にはある。上述したように、日本全体の産物が把握されるようになるのと同時に、物流の移動も活発になり、東海道が整備される等、交通網も益々発達する。お伊勢参りなども盛んに行われ、各地の名物ガイドブックの出版も流行するのである。例えば、岩瀬文庫が所蔵する版本を例に挙げると、『駿河土産』、『江戸土産』等がある。

また、江戸では参勤交代などで、居住者の多くが男性単身赴任者となるが、このような上京者に対するガイドブックも出版され始める。岩瀬文庫所蔵は『江戸買物案内』、『江戸買物獨案内』<sup>62</sup>、『江戸名所四十八景』、『江戸名所圖會』等である。

また、江戸時代、特に中期から後期には、料理に関する出版物も非常に多く、岩瀬文庫所蔵本に限って見ても、寛永二十年(1643)『料理物語』、寛文十年(1670)『料理献立集』、元禄二年(1689)『合類日用料理抄』、元禄六年(1693)『八百屋集』、安永二年



(1733)『料理いろは包丁』、安永五年(1736)『献立部類集』、天明二年(1782)『豆腐百珍』、天明五年(1785)『卵料理秘密箱』、同年『諸国名産大根料理秘傳抄』、同年『大根一式料理秘密箱』、同年『大根包丁物切方之秘伝』、寛政七年(1795)『鯛百珍秘密箱』、同年『海鰻百珍』、嘉永二年(1849)『年中番菜録』、嘉永六年(1853)『東都豆腐之伝』、天保六年(1835)『江戸料理通』等様々な本が出版されており、この図書館はその他、江戸時代のお菓子に関する著作も多く所蔵する。

ところで、単身赴任の下級武士は下屋敷の長屋に住み、交代で炊事を担当するが、特に文化・文政時代から、安い外食産業も発達し始め、外食することも多くなる。天保十一年頃(1840)に描かれた江戸東京博物館蔵『久留米藩江戸勤番長屋絵巻』はそのような江戸での長屋生活における飲酒風景等を描いている。

また、例えば、武蔵国忍藩尾崎準之助貞幹による彩色が施された草絵や食事風景の絵も多い慶応義塾大学所蔵『石城日記』から、文久元年(1862)六月十五日から同二年四月二十七日の十ヶ月の外食記録を計算してみると、以下のようになる(この時の尾崎準之助貞幹の年齢は三十四～三十五歳)。

文久元年六月十五日～二十一日は、外食率：36%、文久元年七月一日～四日(二日を除く)、外食率：50%、文久元年八月二日及び五日の外食率：25%、文久元年九月一日及び三日～九日、外食率：43%、文久元年十一月一日～十七日(十一日、十四日を除く)外食率：54%、文久元年十二月一日、六日～十一日、十六日～十七日、二十一日～二十二日、外食率：23%、文久二年一月一日～六日、九日～十日、十二日～十三日及び二十八日、外食率：32%、文久二年二月五日～六日、十日～十四日、十七日～十八日及び二十二日、二十六日～二十八日、外食率：50%、文久二年三月二十日～二十一日及び二十三日、二十五日～二十七日は外食率：45%、文久二年四月二日～四日、八日～九日、十二日、十六日～十七日、二十二日、二十七日、外食率：42%。

この統計からは、尾崎準之助の外食率がかなり高いことが分かる。また彼は料理が得意であり、友人達に手料理を振る舞っていることも日記には記されていることから、料理が苦手なための外食でないことは明らかである。

この時代には、外食産業の多くに、屋台での営業が見られ、路上で売られた食べ物は、心太、冷水(砂糖入り)、白玉、ゆで豆、ゆで玉子、汁粉、甘酒、白酒などで、江戸、大坂、京都で販売された記録が文献に記されている<sup>63</sup>。

江戸の屋台で販売された食べ物には、蕎麦、握り鮓、天麩羅があり、鮓と天麩羅は天明期頃(1781年～)に流行し始め、文化期頃(1804年～)から屋台で売られたことが分かっており、職業の詳細な説明、食べ物の種類までもがそれぞれ画でも解説されている。

文化二年(1805)に出版された『熙代勝覧』には、江戸の中心街であった日本橋から

今川橋において、店舗を構える店として、蕎麦屋、寿司屋、一膳飯屋、居酒屋、菓子屋、仕出し屋、汁粉屋などが描かれている。通町筋の全店舗の合計は百一軒で、その内の十九店舗が食堂など外食産業に携わる店である。

このような外食産業の発達や諸国の物産への理解を庶民層にまで大きく広げたのが、食物や産物関連の見立番付である。文久三年（1863）に出版された『改正増補国宝大阪全図』<sup>64</sup>所載の「大阪産物名物大略」はその典型的な見立番付で、大阪の名物を記したものである。天王寺蕪、宮の前大根、守口細大根、天王寺大根、天満白大根、田邊大根、木津干瓢、難波村胡蘿蔔、木津冬瓜、倉橋大根、玉造黒門白瓜、毛馬胡瓜、市岡西瓜、九条茄子、本庄茄子、小松茄子、鳥養茄子、吹田烏芋等の名物を紹介する。

また、大阪府立中之島図書館蔵『浪花みやげ』3編2に所収される天保十一年（1840）版「包丁里山海見立相撲」では、野菜、茸、魚類のランク付けを行っており、同図書館蔵『浪花みやげ』1編5に所収される文化五年（1808）版「青物料理の献立」は、野菜のランク表である。その他にもおかずのランク表である「日用おかつの見立」、「日々徳用儉約料理角力取組」、「日用儉約料理仕方角力番付」や「江戸会席料理老舗番付」、「江戸自慢蒲焼茶漬番付」、「御料理献立競」、「諸国産物大数望」、「大日本産物相撲」、「東海道五十三駅名物合」、「銘酒づくししんばん」、「かつほぶし位評判」、「即席会席御料理」、「尾陽名物」等の料理や産物の名物見立番付が数多く出版されている。

今日の旅行ガイドブックに掲載される「美味しい店」リストと同様に、カラーの絵入りで紹介されることも多く、吉宗の政策による物産調査が大きく発展し、庶民、下級武士に対して、これらの番付表は新たな文化発信の中心となったとも言えるであろう。

こうした文化的な背景から、二章で分類した『魚類青物合戦状』や『食類合戦和睦香之物』、また、『さかなあを物大合戦』、『茶漬原御膳合戦』、『菓物見立御世話』、『諺東埔寨掌』、『化物大江山』等が創作されてきたのであろう。

安永九年（1780）刊『果物見立御世話』は林檎、蜜柑、橙、梨、梅、桃、枇杷、李、杏、柑子、柿、柚子、九年母、柘榴、苺、橘、西瓜、真桑瓜、葡萄、金柑が二つに分かれて争う「合戦物」であり、寛政九年（1797）刊『諺東埔寨掌』は十辺舎一九作画で、南瓜、白瓜、真桑瓜、茄子が登場する「敵討ち」の話である。

安永五年（1776）刊の『化物大江山』は黄表紙本で、恋川春町作・画であり、鰻節、大根おろし、陳皮、唐辛子等の蕎麦の薬味が物語に現れ、活躍する。『酒呑童子』の見立であり、源頼光が蕎麦、大江山の酒呑童子が鱈で、胡椒を擬人化した鱈の手下もいる<sup>65</sup>。当時の江戸で流行する蕎麦とその薬味を頼光以下の四天王に見立て、酒呑童子の鱈を退治し、江戸から追放する物語である。ただし、屋台の蕎麦屋は敵と見なされており、一般の店舗を持つ蕎麦屋から嫌われていた等の世相も垣間見ることのできる異類合戦物である。

山本聖子氏は黄表紙六十四作品の絵における食の場面の統計を取っているが、茶屋等での酒宴が六十五場面の画の中で五十五枚、酒宴を伴わない食事風景では、二一場面中十四場面が茶屋であることを明らかにしている<sup>66</sup>。この事実も江戸後期には、外食産業が如何に盛んだったかを如実に示している。

このように分類した①、②、③からは、以下のことが分かる。

1. 『本草綱目』等の「本草学」の研究の発展や吉宗の物産政策の進展により、植物を写生したり、生産高を正確に把握したりする機運の誕生。
2. 出版文化の隆盛から、庶民向けの啓蒙書が生まれ、また、同時に「産物・名物」等の知識の広がり。
3. ガイドブックや外食産業の発展により、正確に描写された料理やその原料に対する知識の増加が、多くの果蔬や食物加工品を擬人化して人々が楽しむ要因となったこと。また、以上のような理由から、『江戸時代 落書類聚』において、植物や果蔬が地口としての対象から少しずつ除外された理由が理解できる。室町後半、江戸時代初期に現世肯定、享楽性、時事性を持った「笑い」の対象とされ、地口で語る「落書」のような世界で描かれることも多かった果蔬が、江戸時代中期以降には、大衆化された出版文化の発展の中で、時には、啓蒙書のような擬人化された「見立図」の中で描かれるようになる。同時に、三井文庫蔵「青物年季證文之事」のように一枚刷りの地口の摺物や読み本の中に駄洒落として描かれる傾向が拡大したために、「落書」の世界で、果蔬を地口として使う必要性が薄れたのである。

そして、擬人化の対象は、庶民が生産し、また身近であった果物、根菜類や瓜科の植物、マメ科や茄子等が中心となるか、外食産業の発展の中で、加工品としての食物が中心となる。また、室町後半のような植物に関する物語が減少するのも、植物学として、写生の対象として、植物を描く傾向や大衆向けの出版産業の増加に伴う果蔬や加工品食品の擬人化がより増加したからであろう。

この章では、江戸初期の作品から、

- ① 食物である植物が記される傾向がより強くなること
- ② 江戸の後半には、果蔬や食物の加工品の合戦物が増加すること。

を取り上げ、江戸文化の発展に鑑みて考察した。本草学的発展が庶民を啓蒙するために分かりやすく、身近な果蔬を擬人化して行く傾向を持ったこと、そして、特に江戸後期には、外食産業が発展し、店で提供される食物が中心として擬人化されたことを挙げた。次章では、果蔬をモチーフとした画と「草木国土悉皆成仏」に関わる「水陸斎」の影響の可能性について考察し、画に関わる植物の擬人化を明らかにしたい。

#### 4. 果蔬画の伝統と水陸齋の影響による植物の擬人化

富山県高岡市にある瑞龍寺は、寛文三年（1661）の前田利長の五十回忌に向け、前田利常によって造営された寺である。利長菩提寺の中心である法堂内陣は、格子天井になっており、格子の一つ一つに、百以上にも上る草花が描かれている。牡丹、藤などの植物以外にも、食用である大根、茄子、瓜、蓮根、甘茶蔓、胡麻、蕪等が描かれ、狩野派の絵師であった狩野安信（1614～1685年）作とされている。

位牌のある法堂内陣の天上に植物が描かれる事実は、二章で述べた「草木国土悉皆成仏」が強く定着した思想であったことを示している。伊藤若冲が描く「果蔬涅槃図」は、二股大根が、伏せられた籠を寝台にして、中央に横たわり、その周囲に野菜や果物が配置される画の構図上から、釈迦入滅の情景を描いた「釈迦涅槃図」の見立画と考えられている作品である。その画にも、八十八種類の果蔬が描かれており、「草木国土悉皆成仏」を強く感じる作品となっている<sup>67</sup>。

ところで、「草木国土悉皆成仏」思想が中国で生まれ、上述した明代の儒学者である王陽明が草木、山川も含め、自然のもの全てが人と一体であるとする哲学が誕生しているとするなら、「山水画」においても、果蔬が描かれるのは当然と考えられる。

事実、野菜や果物、鳥や虫等を描く作品は北宋以来の伝統があり、宮廷画院の様式を踏まえたもので、一般に「蔬果図」、「雑画」、「花卉」と呼ばれ、日常卓近な題材が中心となっている。南宋の伝牧谿、宮内庁三の丸尚蔵館蔵「客来一味・即庵日飴図」（双幅）は大根を描く。明代の画家である黄道周も「墨菜図」として、大根、人参を描く。

日本では、是庵作「瓜に虫図」<sup>68</sup>（16世紀）、雪村作（1504～1589年頃）の「蕪図」、狩野探幽『探幽縮図』「花鳥走獸」や「山水人物花鳥」及び「草木生写」には、筍、大根、茄子、葡萄、瓜、蕪、南瓜が描かれる（図5、図6、図7）。

「松村月溪」の画号で知られる呉春（1752～1811年）にも「蔬菜図巻」があり、筍、胡瓜、ササゲ、白瓜、茄、唐辛子、葉生姜、豌豆、南瓜、ナタマメ、里芋、大豆、茗荷、コウタケ、椎茸、シメジ、ヒラタケ、大根、百合根、水菜、チョロギ、蕪、人参、フキノトウ、独活、慈姑等が描かれている。

江戸後期では、伝山田道安作「鮎鮎・瓜・茄子図」<sup>69</sup>（ボストン美術館蔵）、鈴木其一作「貝図」<sup>70</sup>（プライスコレクショ



図5 『探幽縮図』「花鳥走獸」  
京都国立博物館蔵



図6 『探幽縮図』「草木生写」  
(部分) 京都国立博物館蔵



図7 『探幽縮図』「山水人物花鳥」  
(部分) 京都国立博物館蔵

ン)では、貝と梅、葛飾北斎により「芋と桔梗」、「筍と石竹」、「蓮根と河骨」<sup>71</sup> (どれも肉筆帖)が描かれている(ヴィクトリア アンド アルバート美術館蔵)。同コレクションは、喜多川歌麿の「筍と虫」も蔵している。室町時代から江戸時代後期まで、全体を通して、数は多くないが、山水画の伝統により果蔬が描かれていることは確かである。

この点から、伊藤若冲は「瓢箪・牡丹図」、「菜蟲譜」や「果蔬涅槃図」も含め、多くの果蔬を描く絵師であったが、山水画のその他に分類される「雑画」を得意としていたと言えるのかもしれない。

卑近な果蔬等が描かれる山水画の伝統が存在していたなら、3章で述べたような果蔬が、図像として擬人化されて行った事実もこのような伝統を内包していたからかも知れない。また、草木、山川も含め、自然全体が人と一体であると、「草木」も成仏するとする思想上で、山水画の伝統があるとするなら、中国における「水陸齋」の伝統もこのような「草木」も成仏する思想に影響を与えた一つと言える可能性がある。

南宋時代の僧志磐が咸淳五年(1269)に撰したとされる天台宗史である『佛祖統紀』は、梁の武帝の夢に神僧が現れ、六道四生を救うため「水陸大齋」実施するよう請う。しかし、夢から覚めた武帝はその儀式の式次第をどの僧侶に照会しても、誰も知らない。そこで、神異僧宝誌の助言に基づき、儀文を起こし、天監五年(505)二月五日に建初寺より、佑律師を招き、金山寺で、最初の「水陸大齋」を行ったとする<sup>72</sup>。

鷹巣純氏は現存する志磐撰述・株宏重訂の『法界聖凡水陸勝会修齋儀軌』六巻が、『佛祖統紀』の中で志磐自身が言及する『新儀六巻』に基づくもので、古態をとどめるものと推定している<sup>73</sup>。一時廃れたこの儀式は、『釈氏稽古略』によると、唐の咸亨二年(671)三月に復活し、法海寺の英禪師が大覚寺の義済から「水陸義文」を譲り受け、再び流行したとする<sup>74</sup>。

水陸齋または水陸会は元来仏教儀礼で、施餓鬼の一種とされるが、この儀礼の特徴は仏教だけでなく、道教の諸神も招くことにある。そして、諸仏、諸菩薩、諸羅漢、諸祖師、諸神仙の力によって、六道一切の霊や鬼を慰撫し、「施餓鬼会」のように飲食させ、仏に帰依させた上で、浄土へ導こうとするのである。その際に用いられる画が「水陸画」であり、戒壇のまわりに仏教関係の諸仏諸神、道教の諸神、救済される立場の衆生や鬼類の画が懸け並べられる。また、水陸画に描かれる餓鬼（孤魂）は、従者たちを引き連れ、合掌して行進する姿として描かれるのが通常である。

日本において、この儀礼に関する書物は、東京大学文学部図書館が所蔵する李氏朝鮮時代の闕名氏編中宗三十年（1535）の版本『水陸無遮平等齋儀撮要 卷附疏榜文牒節要』や宮内庁書陵部図書寮蔵、慈雲（遵式）撰『金園集』三巻が挙げられる。慈雲（遵式）は宋代（964～1032年）の天台僧であり、彼が記した『金園集』の中巻にある「施食正名」、「施食法及び施食法式」、「施食文」、「施食觀想菩薩撞育材職方所問」、下巻にある「改蔚修資決疑頒並序」が「水陸齋」の儀礼における「施餓鬼会」のような「飲食」部分に相当すると思われる。

中国の宝寧寺に明代の水陸画があり、山西省博物館編『宝寧寺明代水陸画』（1988年刊）には、儀式の解説が記されており、長いが引用する<sup>75</sup>。

「第一天三更外坛洒浄，用法水遍洒戒坛，使戒坛成为浄土。四更内坛结界，用法力使戒坛与尘俗隔绝，不受外界干扰。五更遣使发符，上呈佛、菩萨、神道、诸天，下召六道四生，请来赴会；同时，于大雄宝殿左前方建幡，幡上写“修建法界圣凡水陆普度大斋胜会功德宝幡”。第二天四更请上堂，即悬挂水陆供轴，供养诸佛、菩萨、缘觉、声闻、明王、天龙八部、婆罗门仙、梵王、帝释、二十八天、尽空宿曜尊神，五更奉浴，置浴盆香水，备上堂诸神沐浴。第三天四更供上堂，正中供毗卢舍那佛、释迦牟尼佛、阿弥陀佛、左右供诸神。上供画轴均用黄绫装裱。画像之下，列插牌竿，上书各位名号。下置供桌，桌上罗列香花、灯烛、时果、佳肴。桌前更置四台，台上分置铜磬、斗鼓、铙钹、手铃等法器，备主法、正表、副表、斋主四人使用。并陈设仪轨、经典等以备用。五更请赦，午刻斋僧。第四天三更，请下堂，悬挂五岳河海大地龙神，古得人伦、阿修罗众、冥官眷属、地狱众生、幽魂滞魄、无主无依诸鬼神众、法界旁生等轴，下堂画轴均用红绫装裱。四更奉浴，五更说戒。第五天四更，诵《信心铭》，五更供下堂，午刻斋僧。第六日四更，主法亲祝下堂，午前放生。第七日五更，普供上下堂，午刻斋僧，未时迎上下堂至外坛，申时送圣将应烧蘸的文告符牒一律焚烧，请来的鬼神以礼送走，为道场的最後一环。在这七天当中，前六天每夜放焰口一台（即施食），“诸仙致食于流水，鬼致食于浄地”。施食对象为婆罗门仙及地狱冤魂饿鬼。第六夜放五方焰口，全体僧众一律参加，为水陆道场的高峰，第七夜即送圣结束法会。」

一日目：「三更」時に外壇を清める。戒壇は法水により清められる。「四更」時に内壇

に结界が施される。法力によって戒壇と俗世間を隔離させ、外部からの干渉を阻止するためである。「五更」時に、六道の孤魂の許へ遣使を派遣する。さらに、仏、菩薩、神道、諸天を奉請する。そして、大雄宝殿の左前方に幡をたて、幡に「修建法界聖凡水陸普度大齋勝会功德宝幡」と記す。

二日目：「四更」時に上堂に水陸画を掛ける。諸仏、菩薩、縁覚、声聞、明王、天龍八部、婆羅門仙、梵王、帝釈、二十八天、盡空宿曜尊神を供養する。「五更」時に「奉浴」（招請した孤魂を洗い清め、新しい衣に着替えさせるために、前もって用意した白紙で作った小さな衣を水の入った洗面器の上で燃すのである）。浴盆香水を用意し、上堂諸神の灌浴を準備する。

三日目：「四更」時に上堂で、真中に毗盧舍那仏、釈迦牟尼仏、阿弥陀仏、左右の諸神に供する。上供する掛け軸は全て黄凌で表装する。凶像の下に、牌を列設、その上に各位の名号を記す。下に供卓を設置、供卓の上に香花、灯燭、時果、佳肴を並べる。供卓の前に四つの台を設置、台の上にそれぞれ銅磬、斗鼓、鐃鈸、手鈴などの法器を置く。主法、正表、副表、齋主の四人が使用する。儀軌、經典等を備用として置く。「五更」時に請赦を行う。午刻齋僧。

四日目：「三更」時に下堂に六道一切の霊や孤魂・鬼を奉請する。五岳河海大地竜神、古得人倫、阿修羅衆、冥官眷属、地獄衆生、幽魂滞魄、無主無依諸鬼神衆、法界旁生等の軸を掛ける。下堂の全ての掛け軸は紅凌で表装する。「四更」時に奉浴を行う。「五更」時に説戒を行う。

五日目：「四更」時に「信心銘」を誦する。「五更」時に下堂に供する。午刻齋僧。

六日目：「四更」時に主法は自ら下堂の祝いを行う。午前に放生を行う。

七日目：「五更」時に上下堂で同時に供する。午刻齋僧。「未の刻」に上下堂を外壇に迎える。「申の刻」に送経を行う。文告符札を焚焼する。礼をもって鬼神を送る。

以上のようにして、孤魂を浄土に往生させるのである。かなり大規模な儀式が1週間も続き、延祐三年（1316）に金山寺でこの水陸齋を行った時、参加した僧侶は1500人に上ったと『宝宁寺明代水陸画』の解説書は記している<sup>76</sup>。

ところで、このような水陸齋の儀式は「草木国土悉皆成仏」と同様に草木・瓦礫・山河・大地・大海・虚空等の非情なものまでが成仏するとする思想と同根であるとも考えられる。そして、上述したが、水陸画の餓鬼（孤魂）は、従者たちを引き連れ、合掌して行進する姿に描かれるのが通常である。

この『宝宁寺明代水陸画』に紹介される水陸齋図の「牡丹夫人」の画には、木状の孤魂が上部に描かれている（図8）<sup>77</sup>。同様にギメ美術館所蔵の景泰五年（1454）の銘を有する「曠野大将」と表題のある掛幅にも、草に依り、木に附く者として、牡丹婦人に伴う蕪と思われる子供、木の精霊、鉞物の精霊等が描かれている<sup>78</sup>。さらに、藤岡摩里子

氏は、ギメ美術館蔵伝李公麟「掲鉢図」にも同様の木の精霊が描かれていることを指摘している<sup>79</sup>。

藤岡摩里子氏が指摘する「掲鉢図」は、鬼子母神を主題にしたもので、「水陸画」と同様に、鬼子母神が眷属を引き連れ、行進している姿として描かれることが多い。鬼子母神は『仏説鬼子母経』<sup>80</sup>、『鬼子母失子縁』<sup>81</sup>、『根本説一切有部毘奈耶雜事』<sup>82</sup>三十一巻に、鬼子母神の末子である嬪伽羅が世尊によって、鉢に隠されたエピソードが語られている。「掲鉢図」はその嬪伽羅を鬼子母神が取り返そうと、一族・眷属が群れをなして探し回っている様を描く。特に、嬪伽羅が鉢に隠されている様子を描いた図巻が多く、北宋末期の李公麟（1049～1106年）や明代の仇英（? - 1552年?）の作品が有名である。

また、清代の李森『鬼子母掲鉢図』<sup>83</sup>（個人蔵、京都国立博物館2001年「ヒューマン・イメージ」）にも同様に擬人化された木が描かれているのであり、牡丹と想像される植物も同時に描かれている。そして、和漢の古画を写した狩野探幽の『探幽縮図』『宝積経図巻』（京都国立博物館）には、伝李公麟の模写がある。その図巻の中にも、同様の擬人化された木が描かれており、既に、藤岡摩里子氏<sup>84</sup>や小松和彦氏が紹介している<sup>85</sup>。

狩野探幽の手による「宝積経図巻」は、冒頭に寛文十一年（1671）六月二十七日に探幽の許に届けられ、「奥書筆にては無之。中古ノ訝敷絵也」と記されている（図9）。落款印章は李公麟となっているにも関わらず、探幽は李公麟筆を否定しているのであり、藤岡摩里子氏も指摘するように、探幽は李公麟の画風を見分けることができたと言える<sup>86</sup>。逆に言えば、江戸初期の時点において、このように木が擬人化された画を探幽は見知っていたとも言えよう（図10、図11）<sup>87</sup>。

また、東京国立博物館蔵「異本」『百鬼夜行絵巻』<sup>88</sup>では、牡丹、木、瓢箪状の妖怪が



図8 「六道四生一切情精魂众」  
宝宁寺蔵



描かれ、瓢箪妖化物と横に記されているが、頭上の上に葉が描かれており、瓢箪にはない特徴を持っている。その東博「異本」では、木は「古木之妖化物」と記される。

京都市立芸術大学蔵『百鬼夜行絵巻』(制作年代は江戸時代と推定される)にも、木と東博「異本」に似た瓢箪が描かれているが、頭上に葉が青々と生い茂っており、大根か蕪の種類としか見えないのである(図12、13、14)<sup>89</sup>。

また、スペンサーコレクション蔵『百鬼夜行絵巻』三巻中の一巻にも、木の妖怪が見出

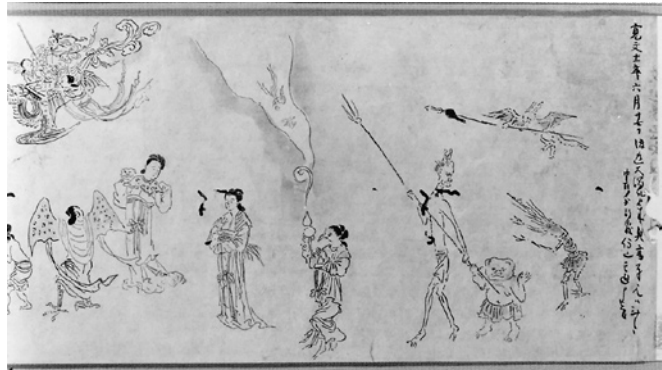


図9 「宝積経図巻」冒頭(部分) 京都国立博物館蔵



図10



図11

どちらも「宝積経図巻」(部分) 京都国立博物館蔵



図12 『百鬼夜行絵巻』異本(部分) 東京国立博物館蔵



図13 『百鬼夜行絵巻』異本(部分) 東京国立博物館蔵



図14 『百鬼夜行絵巻』異本(部分) 京都市立芸術大学蔵

せ、日文研所蔵『百鬼夜行絵巻』にも、木の妖怪が同様に描かれており、日文研本の祖本は室町と推定されている<sup>90</sup>。

このように、植物を図像として擬人化する始まりは、紹介したような「水陸図」や「掲鉢図」との関係が濃厚である。水陸齋の日本への影響に関する研究は、鷹巢純氏意外は非常に少ない<sup>91</sup>。民俗学ベースでは、福島県伊達郡川俣町にある東円寺境内に「水陸齋感應記の碑」と称されるものがあり、凶作の兆候が現れた際、天明の餓死者の冥福を折り、僧侶を集め「水陸齋」（施餓鬼）を行うことで、凶作を免がれたとする記念碑があるのみである。

水陸齋は、仏教と道教の信仰を混交し、中国仏教が認める「草木国土悉皆成仏」を実践するような思想とも考えられるため、日本でも受容しやすい思想とも思える<sup>92</sup>。また、水陸齋が行われる儀式に使用される「水陸図」から、「掲鉢図」が発展してきたことも考えられる<sup>93</sup>。

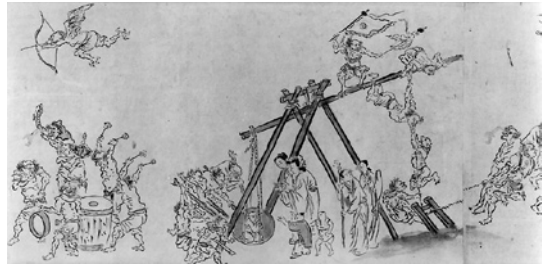


図15 「宝積経図巻」(部分) 京都国立博物館蔵  
「嬪伽羅を取り戻そうとする鬼子母神」

上述した『法界聖凡水陸勝会修齋儀軌』六巻の著者である志磐著『仏祖統紀』は、鬼子母神に関して、「出生飯。此有二縁。一者涅槃經。令施曠野鬼。毘奈耶律。令施鬼子母等。此曹本食。肉啖人。佛化之受戒不殺。乃囑弟子隨處施食。今齋堂各各出衆生食是也。此唯出家人行之。二者焰口經。託阿難爲縁。令施餓鬼食。今齋堂別具小斛。於食畢衆作法施之。或各具小生斛。夜間呪施。此通道族行之三長齋。佛謂提謂長者曰。四時交代歲終。」<sup>94</sup>と記し、鬼子母神に対して、施餓鬼の必要を述べている。

また、水陸齋の起源を語る（『大正藏』第四十九巻「史伝部一」『仏祖統紀』321ページ中段以降）条にも、『施食通覽』によって、「改祭。佛爲曠野鬼神鬼子母等。改棄血食而受僧衆出生之食。」<sup>95</sup>と記すのである。そして、この『施食通覽』にも「仏説鬼子母経」と共に施食法や水陸齋の儀礼等が指摘されている<sup>96</sup>。この点からも、水陸齋や「水陸図」と鬼子母神が描かれる「掲鉢図」の関係が明らかになるであろう。

既に述べたように、水陸齋の儀礼書は日本に入っており、今後の課題として、水陸齋の日本での受容を詳細に検討したいと考えている。少なくとも、室町時代の後半に「草木国土悉皆成仏」思想に依る文芸作品における植物の擬人化が進み、「水陸図」や「掲鉢図」等の中国文化を受容する中で、その影響を受けながら、画における植物の擬人化が進展したことは間違いないと考えるのである。

## 5. 結語

この論文では、室町後半から江戸末期までという広い範囲の中で、植物・食物の擬人化がどのように進んだかを明らかにした。室町後半の作品群は、七・五調で語る物語が多く、掛詞や縁語が多用され、言語遊戯も多数表現されていることや「草木国土悉皆成仏」の思想が植物の擬人化に対して、大きな影響を与えていることを示した。その反面、果蔬を主題とする時は、どちらかと言えば、現世的で、享乐的であった。

ところが、江戸に入ると、果蔬が徐々に擬人化の中心となり、江戸中期以降は、本草学の発展や博物学的な視野の広がり及び外食産業の隆盛により、啓蒙書による果蔬やその加工品に対する擬人化が発展し、その反面、鑑賞的植物の擬人化が減少する。そして外食関連食物の擬人化の増加や果蔬を主題とした地口を使用した文学の隆盛があったことを明らかにした。主題となった果蔬は庶民に身近で、生産高の高い根菜類、瓜類や茄子及び南瓜であり、生産果物であった。

また、図像に関しては、「草木国土悉皆成仏」思想から、そもそも植物を主題とすることは当然の成り行きであり、果蔬も少ないながら、その例があることを示した。そして、中国にも「草木国土悉皆成仏」思想があり、同時に、全ての餓鬼（弧魂）を救うとされる「水陸齋」が存在し、その儀式に使われる「水陸画」やその「水陸画」から発展したと思われる「掲鉢図」に木、牡丹、蕪または大根を擬人化した作品群があり、日本への影響に言及したのである。

今後は、室町末期、江戸初期、江戸中期、江戸後期と四分割し、それぞれの作品を詳細に分類、検討することで、植物の擬人化の文化的背景を考察したいと考えている。また、「合戦物」、「草木国土悉皆成仏」思想、「水陸図」及び「掲鉢図」に関して、大陸文化の影響が大きく関わっていることから、東アジア全体を含めた文化の流れを総合的にも見ていく必要があると考えている。

<sup>1</sup> 署名や年記がなく、若冲の印章しか残っていない。また、本人がこの作品に言及した記録もないため、制作年代が不明の状態である水墨の掛幅（縦 181.7×横 96.1cm）。

<sup>2</sup> 青物と魚類の戦争に見立てた紀伊派と水戸派の争いの図でもある。

<sup>3</sup> 『学習院大学紀要』第8号7～20ページ 2006年。

<sup>4</sup> 岡本勝〔編〕『初期上方子供絵本集』貴重古典籍叢刊13「軍舞」97ページ 角川書店 1982年。寛文・延宝期（1661～1681年）に京都で板行されたと考えられている。

<sup>5</sup> 大永・享禄年間（1521～1532年）頃成立。

<sup>6</sup> 前掲書（註3）7ページ。

<sup>7</sup> 前掲書（註3）7～8ページ。

<sup>8</sup> 高橋忠彦他編「御伽草子」『魚類精進物語』237～249ページ。汲古書店 2004年。

<sup>9</sup> 徳江元正「さくらの姫君 住吉物語など」『国学院大学図書館紀要』Vol3 19～59ページ 1991

年。

<sup>10</sup> 『室町時代物語集』第三を参照。井上書房 1962年。

<sup>11</sup> 『室町時代物語大成』第三を参照。角川書店 1975年。

<sup>12</sup> 『室町時代物語大成』第四を参照。角川書店 1976年。

<sup>13</sup> 徳田和夫氏が『学習院大学紀要』第8号で十七世紀後半と判断する小形の卷子本。

<sup>14</sup> 天明八年(1788)通笑著。森川昭編『近世文学論輯』481~490ページを参照。和泉書店 1993年。

<sup>15</sup> 寛永二十年版『料理物語』(1643)では、これらの植物は当時食料として食べられていたことを記している。

<sup>16</sup> 安永四年~文化三年(1776~1806)の間に出版された黄表紙の作品。享和二年(1802)通笑著。石井研堂校訂『万物滑稽合戦記』527~536ページを参照。博文館 1901年刊。

<sup>17</sup> 前掲書(註16)「続帝国文庫」第32編。

<sup>18</sup> 侯継高編著『全浙兵制考』三巻の附録で五巻からなる。

<sup>19</sup> 『狂言集』『菓争』530ページを参照。小学館 1972年。

<sup>20</sup> 『開元天宝遺事』には風流陣とあり、玄宗皇帝が宮中の遊戯として宮女100人と宦官の少年100人を美しい衣装で戦わせたと記している。新井白石は『折りたく柴の記』において、その事実を「もろこしに花軍ということあり(後略)。」と記し、春の事としている。また、「花軍」は桜の花で打ち合う遊びと考えられていたようである。狩野常信が花軍の画を模写し、徳川家宣に献上したとも記す。『毛吹草』はこのような事実から、「花軍」を春の季語とした可能性もある。したがって、能の『花戦』とは別系統の可能性もあると思われる。『折りたく柴の記』『日本古典文学大系』296ページ岩波書店 1964年。

<sup>21</sup> 拙論「天狗のイメージ生成について」75~92ページ。『言語文化論集』第二十九巻第一号 名古屋大学 2007年。

<sup>22</sup> 『謡曲大観』(明治書院 1930-1931年)所収の236番中30曲が「草木国土悉皆成仏」の思想に依る作品と思われる。『采女』、『春日龍神』、『熊坂』、『現在七面』、『胡蝶』、『佐保山』、『舍利』、『西王母』、『殺生石』、『当麻』、『道明寺』、『知章』、『巴』、『鶴』、『野守』、『半部』、『放下僧』、『仏原』、『身延』、『六浦』、『弱法師』、『杜若』、『西行桜』、『墨染桜』、『定家』、『芭蕉』、『藤』、『遊行柳』、『梅』、『高砂』の30曲である。なお、『殺生石』は石、『胡蝶』は蝶である。

<sup>23</sup> 『日本思想大系』『天台本覚論』『草木成仏事』は167ページ、「真如観」は120ページ。岩波書店 1973年。

<sup>24</sup> 『大正蔵』第十二巻「実積部下・涅槃部全」『大般涅槃経』巻第三十五「迦葉菩薩品」第十二之五(581上段22-23)。

<sup>25</sup> しかしながら、『大正蔵』第九巻「法華部・華嚴部」『妙法蓮華経』巻第三「菓草喻品」第五では、「小根小茎小枝小葉。中根中茎中枝中葉。大根大茎大枝大葉。諸樹大小。随上中下各有所受。一雲所雨。稱其種性而得生長。華菓繁實。雖一地所生一雨所潤(後略)。」(19中段2-6)とし、仏法が衆生に利益をもたらす例えに草木の成長を比喩として使用している。

<sup>26</sup> 『大正蔵』第十一巻「実積部上・涅槃部全」『大宝積経』巻第一百九では、「又如大地荷四重擔。何等為四。一者大海。二者諸山。三者草木、四者衆生。」(674上段11-13)とし、衆生と海、山、草木を区別している。

<sup>27</sup> 『日本古典文学体系』24『今昔物語集』三 79ページ。岩波書店 1961年。

- <sup>28</sup> 『大正蔵』第四十五巻「諸宗部二」 40 下段 1-18。
- <sup>29</sup> 『大正蔵』第四十六巻「諸宗部三」『金剛錍』784 中段 21-24。
- <sup>30</sup> 『伝習録』巻之下 826 ページ。有朋堂書店 1928 年。引用した表現以外にも同様の思想は、巻之上、501 ページ、513 ページ、533 ページ、巻之中、746 ページ、巻之下 824 ページにも記されている。
- <sup>31</sup> 三崎義泉氏『天台學報』第七十号「草木成佛思想の概観」89 ページ 1974 年。
- <sup>32</sup> 「東方學」第八十輯「『懺成草木成佛私記』について」102 ページ。
- <sup>33</sup> 「文学」11, 12 月号『漢字文化圏を読み直す』「東アジアの異類論争文学」43 ページ。岩波書店 2005 年。
- <sup>34</sup> 文政十二年（1829）刊『蔬果争奇』は関西大学中村幸彦文庫リストにもある。
- <sup>35</sup> 前掲書（註 33）43 ページ。
- <sup>36</sup> 前掲書（註 33）43～47 ページ。
- <sup>37</sup> 東京堂出版 1984 年。
- <sup>38</sup> 李時珍著、1596 年刊の本草書。動植物の形態等の博物誌的記述が優れており、日本に多くの影響を与えたとされる。
- <sup>39</sup> 植村政勝著『植村政勝薬草御用書留』宝暦四年刊（1754）には、年の半数近くは諸国で調査がなされたことと記されている。また、職を退く宝暦四年（1754）までの 30 年以上の記録である『諸州採薬記』では、採取したものを江戸まで送ったことも記されている。宝暦五年（1755）に幕府に献上された。
- <sup>40</sup> 九州大学デジタル・アーカイブ参照（<http://record.museum.kyushu-u.ac.jp/>）。
- <sup>41</sup> 全て岩瀬文庫所蔵本を列挙した。
- <sup>42</sup> 同著者による『九淵遺珠』は西尾市岩瀬文庫も所蔵。
- <sup>43</sup> 秋田藩では、『佐竹曙山写生帖』、肥後藩では『昆虫胥化図』等がある。
- <sup>44</sup> 関西大学東西学術研究所 1967 年。
- <sup>45</sup> 同朋舎出版 1984 年。
- <sup>46</sup> 『民間備荒録』以降に挙げた文献は全て岩瀬文庫所蔵本である。
- <sup>47</sup> 作者不明。文政十年刊（1827）。岩瀬文庫所蔵本。
- <sup>48</sup> 斎藤拙堂著、文久元年刊（1861）。岩瀬文庫所蔵本。
- <sup>49</sup> 『はやり病の錦絵』内藤記念くすり博物館 2001 年 8～9 ページ。
- <sup>50</sup> 前掲書（註 49）48～49 ページ。
- <sup>51</sup> 前掲書（註 49）82～83 ページ。
- <sup>52</sup> 前掲書（註 49）88 ページ。
- <sup>53</sup> 原田信男編『江戸の料理と食生活』56 ページ 小学館 2004 年。
- <sup>54</sup> 前掲書（註 17）に所収。絵入りであったらしいが、絵は現存していない。
- <sup>55</sup> 拙稿「果蔬涅槃図と描かれた野菜・果物について」3～24 ページを参照。『言語文化論集』第 XXX 巻 第 1 号 名古屋大学 2008 年。
- <sup>56</sup> 『江戸・東京ゆかりの野菜と花』JA 東京中央会 1992 年を参照。
- <sup>57</sup> 「城端別院善徳寺資料目録」を参照して数えた。富山県教育委員会 1982 年。
- <sup>58</sup> 全て岩瀬文庫所蔵本を例として挙げた。
- <sup>59</sup> 前掲書（註 55）第 4 章の 14～20 ページにて指摘。

- <sup>60</sup> 『初期上方子供絵本集』の中の『軍舞』101ページ。角川書店 1982年。しかし、説教、浄瑠璃物も多く、この本が何故子供絵本とされたのか、その根拠が分からず、将来の研究課題としたい。
- <sup>61</sup> 安永五年刊(1776)、恋川春町作・画『化物大江山』は擬人化された大根、陳皮(蜜柑)が顔に描かれており、『忠臣陶物蔵』は擬人化された徳利が「忠臣蔵」演じる。どちらも、東京都立中央図書館加賀文庫蔵である。図4は、アダム・カバット著『江戸滑稽化物尽くし』216~217ページを参照した。講談社 2003年。
- <sup>62</sup> 同書は大坂で出版された。そして、「飲食之部」があり、菓子屋も含め、六百一件の食事関係の店が掲載されている。しかも、広告料を支払った店しか掲載はしなかったことが明らかになっている。
- <sup>63</sup> 喜田川守貞著『守貞謄稿』を参照。風俗、事物を紹介する百科事典。起稿は天保八年(1837)で、約30年間書き続けたとされる。全35巻。
- <sup>64</sup> 文久三年刊(1863年)。
- <sup>65</sup> この事実から、当時は饅頭の薬味に胡椒が使用されていた事実も分かる。
- <sup>66</sup> 『日本風俗学会誌』34ページ。2001年。
- <sup>67</sup> 前掲書(註55)、7ページを参照。
- <sup>68</sup> 『ボストン美術館日本美術調査図録』N0.14。講談社 1997年。
- <sup>69</sup> 「茄子図」は前掲書(註68)N0.45を参照。
- <sup>70</sup> 「貝図」は、『若冲と江戸絵画』「プライスコレクション」展覧会カタログN0.99。日本経済新聞社 2006年。
- <sup>71</sup> 「蓮根と河骨」は、『ヴィクトリア アンド アルバート美術館所蔵』「浮世絵名品展」カタログNO.132-5。東京美術 2007年を参照。
- <sup>72</sup> 『大正蔵』第四十九巻「史伝部一」『仏祖統紀』321中段。
- <sup>73</sup> 「愛知県下の水陸画関連作例について」『愛知県史』第四号 114ページ。2000年。
- <sup>74</sup> 『大正蔵』第五十巻「史伝部二」 402下段。
- <sup>75</sup> 3~4ページ。
- <sup>76</sup> 前掲書(註75)3ページ。
- <sup>77</sup> 前掲書(註75)155ページ。
- <sup>78</sup> Caroline Gyss-Vermande « Démons et merveilles: vision de la nature dans une peinture liturgique du XVème siècle » Arts Asiatique 43. Fig.1, Fig.8, Fig.18を参照。1988年。
- <sup>79</sup> 藤岡摩里子「掲鉢図 鬼子母神の説話画」『生活と文化:研究紀要』紀要第14号。60ページ及び66ページの図5。2004年。
- <sup>80</sup> 『大正蔵』第二十一巻「密教部」巻第四 290下段。
- <sup>81</sup> 『大正蔵』第四巻「本縁部」下『雜寶藏經』巻第九 492上段。
- <sup>82</sup> 『大正蔵』第二十四巻「律部」巻第三『根本説一切有部毘奈耶雜事』巻第三十一 360中段~363中段。
- <sup>83</sup> 李森(生没年未詳)清・康熙四年(1665)作。
- <sup>84</sup> 前掲書(註79)64ページ。
- <sup>85</sup> 『百鬼夜行絵巻の謎』175ページ 図47を参照。2008年 集英社。
- <sup>86</sup> 前掲書(註79)64~65ページ。
- <sup>87</sup> この「宝積経図巻」の最後には、中国浄土宗の発祥地である東林寺にある「蓮社十八賢図」を李公麟が李冲元のために描いたことが長文で記されている。

<sup>88</sup> この「異本」は狩野派の絵師である狩野晴川院養信（1796～1846年）が文政十二年（1829）に模写したものである。

<sup>89</sup> 田中貴子他著『百鬼夜行絵巻をよむ』図12は26ページ、図13は27ページ、図14は14ページから引用。河出書房新社 1999年。

<sup>90</sup> 前掲書（註84）44ページ、図2の中段及び60ページ。

<sup>91</sup> 前掲書（註73）113～128ページや「弘川寺本地蔵十王図と水陸画」357～378ページ。『汎アジアの仏教美術』中央公論美術出版 2007年。その他に、坂本 広博氏『『施食通覧』の一考察』『叡山学院研究紀要』通号24 2002年、同氏「水陸大斎霊跡記（『施食通覧』所収）をめぐる』『叡山学院研究紀要』通号25 2003年、阿川 正貫「日本における水陸会のかたち」『宗教研究』通号335 2003年がある。

<sup>92</sup> 嘉泰四年（1204）の序文がある宗暁著『施食通覧』は水陸斎に言及し、遵式撰『金園集』からは「施食正名」等が紹介されている。そして、大道一似（1292～1370年）が記したとされる東福寺「普門院経論章疏語録儒書等目録」『大日本古文書』「東福寺文書之一（二十八）」98ページには、この『施食通覧』の名が記載されている。東京大学出版会 1955年。

<sup>93</sup> 杉原たく哉氏は「掲鉢図」に羽を持った半鳥半人が描かれることから、日本の天狗との関連性に言及している。『天狗はどこから来たか』178～187ページ。大修館書店 2007年。

<sup>94</sup> 『大正蔵』第四十九巻「史伝部一」『仏祖統紀』320中段12-20。なお、梁武帝が用いたとする伝承がある「水陸斎儀軌」『慈悲道場懺法』（『大正蔵』第四十五巻「諸宗部二」922～967ページ）は、鬼子母神に触れていない。本来『面然経』、『焰口経』を典拠とする水陸斎では鬼子母神に対する施食は含まれていないとされる。

<sup>95</sup> 『大正蔵』第四十九巻「史伝部一」『佛祖統紀』322下段21-22。

<sup>96</sup> 中国佛教會影印叢書 藏經季員會版『已統藏經』（1967年刊）第百一冊208～227ページ目録には『根本説一切有部毘耶雜事』卷第三十一に基づく、「仏化鬼子母神縁」の他「施食正名」、「施食法」、「施食文」、「施食法式」、「改祭修齋決疑頌（并序）」（全て遵式撰）と続き、雪川沙門、仁岳著「施食須知」による鬼子母神の由来、そして、水陸斎の説明がなされている。また、『大正蔵』第十二巻「宝積部・涅槃部二」『摩訶摩耶經』1006中段15-1007上段6には、鬼子母神が嬪伽羅を隠され、一族で探し回ったことが記されている。

#### [図版の出典及び注記]

図1は「三井文庫」所蔵「青物尽奉公人請證文」を筆者が写真にしたものである。図2は京都国立博物館蔵『探幽縮図』『草木生写』より、図3は『初期上方子供絵本集』『軍舞』101ページより、図4はアダム・カバット著『江戸滑稽化物尽くし』『忠臣陶物蔵』（講談社 2003年）217ページ、「図71」より、図5は『探幽縮図』『花鳥走獣』より、図6は『探幽縮図』『草木生写』、図7は『探幽縮図』『山水人物花鳥』より、図8は、山西省博物館編『宝宁寺明代水陸画』（文物出版社 1988年）「六道四生一切情精魂衆」155ページより、図9、図10、図11は、京都国立博物館蔵の狩野探幽「宝積経図巻」より、図12は、田中貴子他著『百鬼夜行絵巻をよむ』（河出書房新社 1999年）、26ページ下段、図13は同書、27ページ上段、図14は同書、14ページ下段より、図15は、京都国立博物館蔵の狩野探幽「宝積経図巻」より引用した。

[附記]

掲載許可をいただきました三井文庫並びに京都国立博物館には篤くお礼を申し上げます。また、中国関係資料の分類、中国語訳に関して、名古屋大学国際言語文化研究科大学院生頼鉦菁氏に大変お世話になりました。感謝申し上げます。